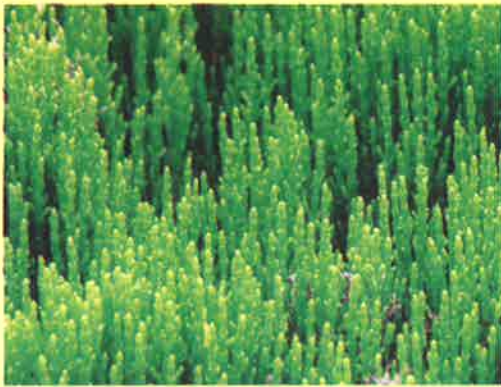


アッケシソウの四季



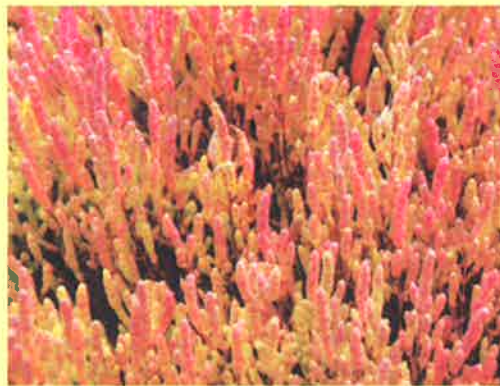
初夏（6月）



早春（3月）



終焉（11月）



紅彩（10月）

アッケシソウ通信

第2号

平成24年10月



アッケシランド遠眺



若い助っ人（山陽高校 空手部）



若い助っ人（山陽高校 サッカー部）

「アツケシソウ通信」第二号 によせて

浅口市長 栗山康彦

秋に紅葉し一面を赤く染めるアツケシソウ。爽やかな秋風が吹き潮騒や鳥のさえずりが聞こえる寄島干拓地内を、絨毯のように真っ赤に彩り、訪れる人を魅了します。

その自生地の面積が年々広まり、知名度や感心の高まりとともに「寄島アツケシソウ」に年間一万人を超える方々が訪れてくださるのも、アツケシソウを守る会の会員の皆様の熱心なご努力の賜と存じます。

来場者の方々へのアツケシソウについての熱心で丁寧な説明をはじめ、年に三回行われている地域の学生も一緒になっての草刈、また、調査、研究など皆様方の日頃のご努力に深く敬意を表し、感謝申し上げます。

絶滅危惧種Ⅱ類に指定されているアツケシソウは、その生態や好ましい生育環境について現在研究中であり、保護育成のための有益な情報も多くはなく、手探りでの保護活動に今後とも大変な部分も多いと存じます。しかしながら、会員の皆様のご尽力により、アツケシソウに対する感心も高まり、みんなで守っていこうという気運も年々増しております。

本州唯一の自生地である寄島干拓地内のアツケシソウが、これからも生育範囲を広げ、多くの皆様に愛されますことを祈念し、「アツケシソウ通信」第二号発行のお祝いのごとばといたします。

「アツケシソウ」の未来に 夢を

会長 作田雅利

今年もアツケシソウは元気に生育し、まもなく紅葉シーズンを迎えます。あざやかなアツケシソウに、多くのアツケシソウを愛する人たちをお迎えしたいとの願いから、守る会の会員一同力をあわせて、生育環境の整備を進めてきました。今年度はまた、より学術的な見地からアツケシソウの保護保存を図るために、岡山理科大学との共同研究を進めています。さて岡山県では、新岡山県環境基本計画「エコビジョン2020」を策定して

「より良い環境に恵まれた持続可能な社会」の実現を目指して、四つの基本目標と二つの推進目標を定めてスタートしています。その基本目標の一つに「自然と共生した社会の形成」があり、代表的な指標として「希少野生動物植物（条例指定）の保護に取り組む地域を10地域（平成十八年度：四地域）に、今一つの指標として「水と緑の潤い空間の保全と創出」により自然公園の利用者数を一、四五〇万人（平成十七年度：一、二三四万人）としています。

そこで私は、寄島アツケシソウを希少植物の保護に取り組む地域として認定していただき、岡山県の天然記念物として保護保存できれば、優れた自然環境の保全につながり、年間一万人を超える見学者が訪れるアツケシソウが加わるこ

とで、当然に自然公園の利用者数の増加に貢献できると考えています。

また、アツケシソウは、鴨類を中心に年間数千羽、種類も十種以上という県下でも有数の冬鳥の飛来地であることから、水鳥公園として整備できれば、身近な自然とのふれあいの場として、より多くの人々が訪れ利用することになると思っています。

さらに、浅口市が今進めているトレッキングコースの一つに、アツケシソウも考えられています。海岸に近い環境にあるアツケシソウは、春から夏に生育する海浜植物をそろえた海辺の自然公園としてぜひ整備すべきであると考えています。

夢は無限に広がり、より良い環境を生かした恵まれた持続可能な社会の実現は先ずアツケシソウからであります。私たち守る会は、その夢の実現を目指して微力を尽すことを、ここに強く提案したいと思っております。

高校生活での収穫と感動

おかやま山陽高校 サッカー部

平井健太

サッカー部に入部して、草刈作業を手伝うようになり、皆さんのアツケシソウに対する思いを知り、最初はただ少し力になれば良いなと思っていました。

僕達は大量の草を前にして、これをつも管理していくのは大変な苦労だと

感じましたし、「守る会」の皆さんと作業をご一緒させて頂く事で、草を刈る事の重大さも知りました。何回か手伝う内に、色々な事にも気づきました。高校生活の中であまりない誰かの役に立てるというすばらしいチャンスを与えられている事。「ありがとう、助かったよ。」と笑顔で言ってくれた時の嬉しく誇らしい気持ち。高校生活の大きな収穫です。後輩達にも大事な作業だという事を伝えていき、これからは草刈作業に呼んでもらえるサッカー部でいたいと思います。

真っ赤なアツケシソウを 見たい

おかやま山陽高校 空手道部

西山葵

私は今までこのような活動に参加したことがなく、正直最初は不安でした。でも「アツケシソウを守る会」の皆さんにいろいろなお話を聴かせて頂いたり、ぬかるみなどで大変なおもいをしながら草刈りをしていくうちに、私も秋になり真っ赤に染まったアツケシソウをとっても見てもみたくなくなりました。秋にはまたみんなで見に行きたいです。

このボランティアで、たくさんの方々がアツケシソウを大切にしているのを知り、そして私もアツケシソウが絶滅危惧種であるからというだけでなく、単純に植物を大切にしようという気持ちにもさせて頂きました。これからも、その気持ちを忘れないようにしたいと思います。

アッケシソウの調査中間報告

岡山理科大学 星野卓二

はじめに

浅口市寄島町に自生するアッケシソウは環境省の絶滅危惧Ⅱ類に、岡山県の絶滅危惧Ⅰ類に指定されています。アッケシソウは一年生の植物であり、毎年種子を生産し翌年の春に発芽して個体を維持しています。従って、種子の生産が一年でも途絶えると絶滅の危機に瀕することになります。寄島のアッケシソウは「守る会」の皆様のご努力により発見されてから生育地が数倍も広がりました。草苳などの地道な手入れを会員の皆様が協力して行なわれたたまものと思います。さらに、紅葉の季節になると多くの観光客が美しいアッケシソウを見るために来られるようになり浅口市の一つの目玉となっております。

このように地元の皆様が主体となり植物の保護保全に取り組む例はありますが、活動が途中でうまくいかなくなるケースもあります。岡山県内では哲西町の鯉ヶ窪湿原が有名ですが、寄島町も鯉ヶ窪湿原と同様に地元の方の協力で保護活動が見事に成功した代表的な例だと思えます。寄島のアッケシソウの起源は今までの遺伝子を用いた研究から、北海道からではなく朝鮮半島を渡って日本に分布を広げたことが明らかになりました。過去、朝鮮と日本の交易の際に運ばれた可能性が高いと思います。瀬戸内地方は歴史的

にも朝鮮半島とのつながりが深く、交易の名残が様々な場所で見られます。このように、寄島のアッケシソウは過去の交易の歴史を探る点からも貴重な植物になりました。

A地区に試験区を設置

昨年からA地区ではアッケシソウの倒匍が見られるようになりました。また、C地区ではアッケシソウの枯死が目立つようになりました。本年四月よりこの原因を解明するために「守る会」の皆様と協力し植物相、土壌および水質の調査を開始しました。

A地区のアッケシソウの倒匍に関して、土壌中の養分が少なくなったことも要因の一つとして考えられます。また、北海道のアッケシソウは、植物体の成長期間が短いため草丈が高くなりませんが、寄島のアッケシソウは紅葉が始まるのが十月上旬であり、発芽が早く遅くまで成長するため、草丈が高くなり倒匍しやすいことも考えられます。

また、B地区の一部に試験区を設けました。アッケシソウの生育条件を探るために七個の一メートル四方の枠を作り、どのように植物が生長するかを調べました。それぞれの枠は、草苳をしたもの、表面を耕したもの、表面を耕しアッケシソウの種子を播いたものなど条件を変えました。コントロールとして何も手を加えない方形区も設定しました。四月上旬に方形区を設置し、一ヶ月に二回程度観察しました。

全く手を加えない方形区ではアッケシソウは発芽するものの成長が悪く枯死するものも見られました。ヨシやシオクグの中で十分な照度が得られなかったものと思われれます。

ヨシやシオクグなどを刈り払った区画では成長は良く枯死する個体はほとんど見られませんでした。そして多くのアッケシソウが見られました。

また、表面を耕しヨシやシオクグの地下茎(写真1)を取り除いた区画では、種子を播種したものとしないう区画を比較しました。種子を播種しなかった区画ではアッケシソウは二〜三個体しかみられませんでした。これは他の区画から種子が入ってきたものと思われる。この実験結果からアッケシソウは一年草であるが、埋蔵種子からの発芽は少ないものと思われる。しかし、アッケシソウは生えていたにもかかわらず、種子が流されたこの区画にはもともと種子がなかったことも考えられます。



写真1. シオクグの地下茎



写真2. 実験区

表面を耕し種子をまいた区画では、多くのアッケシソウの発芽が見られ成長も大変良く、試験区の中では最も草丈も高く良好でした(写真2)。このことからアッケシソウの群落の回復には、表面を耕し種子を播種するのが最も効果的であることが明らかになりました。アッケシソウの発芽率は良く多くの個体が育っています。

C地区の枯死の原因調査

C地区は分布が確認されたときには多くの個体が生育していたようであります。しかし、昨年度から中心付近のアッケシソウが枯死するのが目立ち始めました。特に中心付近の水たまりにはヘドロ状の黒い沈殿物が多く、悪臭も観察されます。水面に黒い膜状の沈殿物がたまりそれが、水たまりの底に沈殿しヘドロ化したものと思われる。水たまりには緑藻類のシオグサが生育していました。膜状の沈殿物はこの緑藻類の枯死したものと思われる。

ます。アッケシソウは海水の流れがほとんど見られない場所では、長年にわたって植物の遺骸が堆積しヘドロ化することにより生育するのが難しいものと思われる。当初から指摘されていたように、ヘドロ化した土を少しでも洗い流すか、

溝を深く掘り深い水たまりを作らないようにすることが必要と思われれます。

水質と土壌の調査

植物が生育するためには土壌の条件が大変重要です。本年度の調査も岡山理科大学の三研究室が協力して土壌と水質の調査を進めています。途中段階ですが、C地区に関しては海水の塩分濃度が、通常の海水より倍近く高い測定結果が得られています。さらに、表面に白く塩が結晶化したものも見られます。しかし、アツケシソウの対塩性は非常に強く、塩田などの塩濃度が高い場所の周辺に多く観察されます。瀬戸内地域でもアツケシソウが生き残っているのは塩田跡地であり塩分濃度は高い場所ですので塩分濃度が異常に高いことが直接の原因とは考えにくいと思います。アツケシソウの枯死の原因は現在のところはつきりしません。今年中に生育地の植物相や水質、土壌の調査結果をまとめたものを作成する予定です。浅口市寄島のアツケシソウの保護・保全に今回の調査が役立つものと思えます。

「守る会」春の研修旅行

皆木マンサクを訪ねて

去る三月八日（木）、守る会はかねてからの念願であった皆木マンサクの自生地の見学と、マンサクを守る会の活動を参考に、勝田郡奈義町皆木に二十六名で研修視察を行いました。

代表の皆木信昭氏の案内で、先ず谷合の自生地を訪ねました。残念ながら花をつけた木は、二本程度しか見当たりませんでした。皆木氏は「数年前から秋を迎える前に葉色が変わり、枯れ落ちる現象が起り、かつてこの谷を見事に染めたマンサクの花がほとんど見られなくなりました」と話されました。また、近年

地域の庭石が白く風化する現象も起きているとのことでした。

続いて、近くを守る会で建設された立派なマンサクの会館に場所を移し、ご婦人の手作りのよ

もぎ団子を頂きながら、今日までの活動の歴史を伺いました。

守る会創設時の話に始まり、地域をあげて取り組んだ最盛期の様子。バスを仕立てて訪れた見学者の賑わい。そして現状へと、興味津々の報告に共感と感動を覚えながら一同耳を傾けました。

マンサクのこのような現状と会員の高齢化によって、現在守る会は解散を余儀なくされているとのことでした。

守る会の人々に別れを告げて、昼食は那岐山麓の道の駅。早春の新鮮な山菜料理たっぷりの昼食に舌鼓を打ちました。

帰路、誕生寺の大銀杏やおかやま自然公園に立ち寄り、有意義な一日でした。



守る会 会員大募集!

「貴方のご参加を待っています」

現在、守る会会員一四〇名のご支援とご協力によって、アツケシランドは大切に保護育成されています。

さらには、草刈時の市内の高校生やスポーツ少年団（ソフトボール）等の献身的なボランティア活動が、守る会に元気と明日への明るい展望を与えています。アツケシランドのより発展的な保護拡大のために貴方のご参加を待っています。

- ①年間会費は五百円で、会の運営費に充てたいします。遠隔の方や高齢の方は、草刈り作業等に参加されなくても結構ですので、よろしくご参加下さい。
- ②年三回の草刈り作業等に参加可能な方の入会大歓迎です。どうぞふるってのご参加をお待ちしています。

編集後記

「アツケシソウ通信」第二号をお届けします。環境省絶滅危惧Ⅱ類指定、浅口市指定天然記念物アツケシソウを大切に保護育成し、未来へ堅実に伝えて行きたいと念じています。

ご多忙の中を皆様からの玉稿を賜り、紙上より厚く御礼申し上げます。守る会では九月末、寄島アツケシソウのルーツを訪ね、韓国仁川に研修視察の旅を行います。次号での報告を楽しみにお待ちください。